

私たちが今日このすばらしい時を賞翫したことを忘れてはならないと。

(一九九八年十月一日受理)

氏文集』二八四「池上小宴問程秀才」

【通釈】

七言。五月五日、内大臣殿の池亭に伺候して、同じく「雲の峯が夏の池に入る」という題で詩を作る。「新鱗臻辰の四字を勅韻とする」

そもそも朝廷や市井で活躍する人々は俸禄を求め、山林に身を隠す人は名声から逃れようとする。だからこそ、漢の蕭何や曹進は長い間高祖の功臣として忙しく働き、隠遁することはなかったし、堯の時代の巢父や許由は長い間仕官もせずに隠遁し、堯帝のお召しにも答えることがなかった。

古の賢人たちといえども、閑と忙との中庸を得た者は少なかったのである。

ここにおいて、内大臣殿は東山の麓に一棟の池亭を営まれる。この地はそもそも安和の左大臣でいらっしやった藤原在衡殿が七叟尚齒会をお開きになった所である。その地を伝領して主人となられる、まことにもつともなことである。

内大臣殿は出仕なされば、大臣として朝廷で帝を補佐する大切なお役目を果たし、宮中から退出なされば、郊外の別荘で月を友とするような風流をお楽しみになる。

閑と忙とを二つながら兼ね備えて天下を導いていらっしやるすばらしさ。誰が敢えて非難を加えようか。

まさに今、五月五日と言う良い時節にあたり、曹植の文章のようすばらしい作品を味わわれる。ああ、内大臣と右大将という文武二府の大任を果たされながら、東山の四方の景色を思いのままに楽しんでいらっしやるとは。

観れば、雲の峯は夏を迎え、水は池に映った雲の陰に注いでいる。

緩やかに吹く初夏の風を感じながら五月雨が上がったことを喜ぶ。

(雲が池に映っているので) 鶴は天空を飛んでいるのに、自然と汀の砂に降り立つ様子であり、魚は池の岸に依りながら、同時に空に昇って龍となったかに見える。

池を渡る船の軽やかな棹さばきによって、馬鞍山の険しい峯(のような水に映った雲の峯)は粉々に崩れてしまい、池に面した釣殿の簾を巻き上げれば、そのまま峨眉山の幾重にも重なった山肌を目の当たりにするかのようだ(しかし、雲の峯は現実の山ではない)。既に、日は留めがたく西の空に傾き、何度も杯がやりとりされる。春風の中で曲水の宴を懐かしく思い出しても、三月三日の桃の盛りは遙かに過ぎ去り、秋の露を愛でながらの重陽の宴を待ち遠しく思っても、九月九日の芳しい汀の菊はまだまだ先の話だ。今日の此の端午の節句のすばらしさも、また喜ばしいことではないか。

私匡衡は、あの後漢の碩儒伯春のごとく、学問の力によって栄誉を得ましたが、未だに詩家の宗匠とまではなっておりません。あの本来の歩き方を忘れた寿陵の若者のごとく、学問の道を歩んでも思うように進めずその険しさにやせ衰えてしまいました。

今日の出来事を詳しく書きつくすこともできず不本意ながら筆を置く次第でございます。

雲の峯ははるかに霞んでいながら、眼前にある。

その陰が夏の池に映って新鮮なたたずまいを見せているからだ。

それは、池の汀の苔の痕と空飛ぶ鳥の通い路とを通い合わせ、

松の生える小山を魚たちと共に在らせる。

羅浮山のような雲の峯は波とともに池の面に暁の有様を織り上げ

紫蓋山にも見まがう雲の峯は水の中から日の光に輝く姿を現す。

だからこの林園の景色に向かって言おう。

◎重陽Ⅱ陰曆九月九日の節句。陽数である九が月と日とに重なっているために言う。菊の節句。「統齊諧記曰、汝南桓景、随費長房遊学累年。長房謂之曰、九月九日、汝家当有災厄、急宜去、令家人各作絳囊、盛茱萸以繫臂、登高飲菊酒、此禍可消。景如言、举家登山。夕還家、見雞狗牛羊、一時暴死。長房聞之曰、代之矣。今世人每至九日、登山飲菊酒、婦人帶茱萸囊、是也」(『芸文類聚』歳時中 九月九日)「臣聞季秋初九者、日月並応、陽数相并之候也」(『本朝文粹』卷十一「九日侍宴觀賜群臣菊花応製」紀長谷雄)

◎菊潭Ⅱ地名。河南省内郷県の西北に析谷という谷があり、水辺に甘菊が生えていたので菊潭水と呼ばれた。その水は甘く芳しく、飲んだものは長寿を得たという。ただし、本詩序においては菊の花咲く水辺という意味で用いられている。「暮秋陪左相府書閣同賦菊潭未遍各分一字応教」(『本朝文粹』卷十一詩題 紀齊名)

◎伯春Ⅱ後漢の儒者、召馴の字。建初元年に肅宗の侍講となった。「召馴字伯春、九江寿春人也、曾祖信臣、元帝時為少府。父建武中為卷令。伯春不拘小節。馴、少習韓詩、博通書伝。以志義聞、郷里号之曰、德行恂恂召伯春。累仕州郡、辟司徒府。建初元年稍遷騎都尉、侍講肅宗。拜左中郎將、入授諸王。帝嘉其義学、恩寵甚崇。——後略——」(『後漢書』卷七九下)

◎宗匠Ⅱ師として尊ばれる人物。「莫不宗匠陶均 而群才緝熙」(『文選』卷四七「三国名臣序贊」袁宏)「藤重相者、儒者雅宗匠、国家耆德」(『本朝文粹』卷九「暮春藤重相山莊尚齒會詩」菅原文時)「詩家の宗匠とは文章博士をいうか。しかし、匡衡は永祚元年にすでに文章博士に任じられている。

◎余子Ⅱ寿陵の余子(若者)が邯鄲の都風の歩き方を学ぼうとして、本来の自分の歩き方まで忘れてしまった故事。五「八月十五夜陪員外藤納言書閣同賦月照牖前竹応教」の「歩邯鄲」の語釈参照。

◎学路Ⅱ学問の道。「学路虚名慙夜月 官途寸步踏春氷」(『本朝麗藻』卷下「歳暮遊園城寺上方」大江以言)

◎遺恨終篇Ⅱできばえに満足できないまま筆を置く。「恒遺恨終篇 豈懷盈而自足」(『文選』卷十七「文賦」陸機)

◎渺々Ⅱ遠くはるかな様。

◎苔痕Ⅱ「苔痕粧慵 自知微霜之緩戒」(『本朝文粹』卷十一「暮秋陪左相府諸閣同賦菊潭花未遍」紀齊名)

◎鳥路Ⅱ鳥の飛ぶ道。「難於尋鳥路 險過上龍門」(『白氏文集』一〇四三「送友人上峽赴東川辟命」)

◎松嶠Ⅱ松の生える小山。「行行覓路緣松嶠 步步尋花到杏壇」(『白氏文集』九五五「尋王道士葉堂因有題贈」)

◎羅浮Ⅱ山名。広東省増城県と博羅県の境にある。仙山と考えられていた。高さ三千丈。長さ八百里。「宋謝靈運羅浮山賦曰、客夜夢見延陵茅山。在京之東南、明且得洞経。所載羅浮山事云、茅山是洞庭口、南通羅浮。正与夢中之意相会、遂感而作羅浮山賦曰、——中略——洞穴之宝衢 海靈之雲術 伊離情之易結 諒沉念之羅浮 發潜夢於永夜 若翹波而乘桴 越扶嶼之緬漲 上増龍之合流 鼓蘭 以水宿 杖桂策以山遊」(『芸文類聚』山部上 羅浮山)「遊当羅浮行 息必廬霍期」(善曰、羅浮山記曰、山高三千丈、長八百里。旧説浮山從会稽來博于羅山、故称博羅。今羅浮山上独有東方草木) (『文選』卷二十六「初發石首城」謝靈運)

◎紫蓋Ⅱ紫蓋峯。湖南にある衡山の一峰。「荊州記云、衡山者五岳之南岳也。——中略——山有三峯。其一紫蓋、天景明澈、有一双白鶴、徊翔其上」(『初学記』卷五「衡山」)「紫蓋之嶺風疎 雲収七百里之外」(『本朝文粹』卷八「秋日於河原院同賦山晴秋望多」藤原惟成)「和漢朗詠集」卷下 晴所収)

◎林園Ⅱ樹木の茂った園。「洛下林園好自知 江南境物暗相隨」(『白

とをいう。「其主之得人聖 乃文乃武 皆已欽慕」へ『江吏部集』卷上「夏日陪藤垂相城北山莊同賦淡交唯對水詩」

◎麦風 麦畑を吹く風。初夏の風。「麦風非逐扇 梅雨異隨輪」へ『白氏文集』二四二二「自到郡齋僅經旬日。方專公務未及宴遊。偷閑走筆題二十四韻。兼寄常州賈舍人湖州崔郎中仍呈吳中諸客」

◎梅雨 梅の実の熟す頃の長雨。陰曆五月の長雨。つゆ。

◎霧 トブ、ハフル、トヒアカルへ観智院本『類聚名義抄』

◎紫霄 におおぞら。また、宮中をもいう。「清唳頻咽 紫霄之聽隔雲」

へ『本朝文粹』卷四「同（為入道前内大臣）入道表」大江匡衡

◎登漢之鱗 いわゆる登龍門の故事をふまえる。龍門は水の流れが激しく、ここを泳ぎ登ることのできた魚は龍に変じるといふ。

◎競渡 水の上に小舟を浮かべて競争すること。五月五日の行事。

「又（荊楚記）曰。屈原以是日死於汨羅。人傷其死。所以並將舟楫以拯之。今之競渡是其遺跡」へ『芸文類聚』歳時中「五月五日」へ「競渡相伝為汨羅 不能止遏意無他」へ『白氏文集』一一三四「和萬州楊使君四絶句 競渡」

◎馬鞍 山の名。「馬鞍未解 早鞭重山之雲 舟楫未乾 急棹疊浪之岸」へ『本朝文粹』卷六「申遠江駿河等守状」平兼盛へただし、兼盛の例は一般名詞としての馬鞍で、山名ではない。

◎嶄巖 鋭く険しい様。「谿谷嶄巖兮水曾波（銑曰、嶄巖險峻之兒）」へ『文選』卷三三「招隱士」劉安

◎黛 黛のような色。黒みがかった濃い青色。「誰謂嶺高 浸青黛於綠潭之暎」へ『本朝文粹』卷八「晚秋遊淳和院同賦波動水中山」源順

◎通波閣 『文選』「呉趨行」に描く、海の波に通じるような大きな堀を跨ぐ立派な建物を言うか。「昌門何峨峨 飛閣跨通波」へ『文選』卷二八「呉趨行」陸機

◎峨眉 山の名。蜀の名山。「帶二江之双流 抗峨眉之重阻」へ『文選』

卷四「蜀都賦」左思

◎烏鸞 日鸞に同じ。太陽の運行。「星機北轉 日鸞西廻」へ「歩陸狐氏墓誌銘」庾信へ「烏鸞景暮 鳧藻樂酣」へ『本朝文粹』卷十一「九日侍宴觀賜群臣菊花心製」紀長谷雄

◎鸚鵡 鸚鵡杯。酒器。鸚鵡貝で作った盃。「新豊酒色 清冷於鸚鵡之盃中」へ『和漢朗詠集』卷下酒へ「鸚鵡數巡 所傾者來樂之葉」へ『本朝文粹』卷十一「重陽日侍宴同賦寒雁識秋天心製」大江朝綱

◎曲水 曲水の宴。三月三日に行う。流れに酒杯を浮かべ、その杯が自分の前を流れて行かないうちに詩を賦し、杯を取って酒を飲む。

晋の王羲之が会稽山陰の蘭亭で行ったのが始まりとも、又周公が洛水で行ったのが始まりとも言う。「承和九年歲在癸丑、暮春之初會於會稽山陰之蘭亭修禊事也。一略一又有清流激湍、映帶左右、引以為流觴曲水。列坐其次、雖無糸竹管絃之盛、一觴一詠亦足以暢叙幽情一略一」へ「三月三日蘭亭詩序」王羲之へ「夫曲水本源其來尚矣。昔成王之叔父周公旦卜洛陽而濫觴」へ『江吏部集』卷上「七言三月三日侍左相府曲水宴同賦因流汎酒應教詩序」

◎桃源 桃花源。晋の陶潜が作った「桃花源記」によって知られる。

俗世を離れた仙境。「陶潜桃花源記、晋太康中、武陵人捕魚從溪往、忽逢桃林夾岸。芳華鮮美落英繽紛。復前行窮其林尽水源、山有小口。便捨船從口入、豁然開朗。屋舍田地、阡陌交通、雞犬相聞。黃髮垂髫、怡然自樂。言避秦亂至此。問漁人、今是何世。乃不知有漢魏。聞皆嘆慨。漁人既出。遂迷其所也」へ「應安頃五山版『蒙求』三四三「武陵桃源」へただし、本詩序においては、仙境としての桃源というよりも、三月三日の曲水にちなんで、桃の花の咲き乱れる所という程度の意味で用いられている。三月三日に桃の花酒を飲む風習については、『拾芥抄』「歳事部第一」に「是日、酒漬桃花飲之、除百病益顔色〔本草〕」とある。

堯時隱人、年老以樹為巢而寢其上、故人号為巢父。堯之讓許由也、由以告巢父。巢父曰、汝何不隱汝形、藏汝光、非吾友也。乃擊其膺而下之。許由悵然不自得。乃遇清冷之水、洗其耳、拭其目、曰、嚮者聞言、負吾友。遂去、終身相不見」〔芸文類聚〕隱逸上〕「巢由往返 伊呂去不歸」〔白氏文集〕一〇五「答四皓廟詩」〔白氏文集〕には巢父と許由の二人に言及した詩が六篇見える。

◎安和左僕射 左僕射は左大臣の唐名。藤原在衡のこと。藤原在衡は安和三年（三月二五日に天祿と改元）正月に左大臣になり、同年十月十日に致仕した。

◎七叟會 唐の会昌五年三月二十四日、七十四歳の白居易は同じく七十歳を越えた六人の友人と共に七老尚齒会を開いた。それに倣って日本では大納言南淵年名が尚齒会を開き、続いて安和二年三月、當時大納言であった藤原在衡が自らの粟田山荘で尚齒会を開いた。「胡吉鄭劉盧張等六賢。皆多年壽。予亦次焉。偶於弊居合成尚齒之會。七老相願。既醉甚歡。靜而思之。此會稀有。因成七言六韻以紀之、伝好事者」〔白氏文集〕三六四〇詩題〕「是居幽趣是林泉 七叟降雨繼古賢」〔粟田左府尚齒會詩〕「暮春見藤原相山莊尚齒會詩」賀茂保胤〕「昨日藤原相於東山別業。時開尚齒會。七叟之外。儒士故人。預參宴筵。共述風情」後略〕〔粟田左府尚齒會詩〕詩題 菅原輔正〕

◎有以 理由がある。「古人集燭夜遊、良有以也」〔李太白詩集〕「春夜宴桃李園序」〕「爰宴于林下之池台 誠有以矣」〔本朝文粹〕卷十「暮春侍宴冷泉院池亭同賦花光水上浮心製」菅原文時〕

◎啓沃 心を開いて君主の心に注ぐ。君主を輔佐し導く。「啓乃心、沃朕心」〔書經〕說命上〕「君之心膂待宰相而啓沃 君之耳目待宰相而聰明」〔白氏文集〕二〇五五「策林三八 君不行臣事」〕「夫偏事啓沃者 玄元養生之方難求」〔江吏部集〕卷上「夏日陪左相府書閣

同賦水樹佳趣多心教〕

◎廊廟 正殿。政事を行う所。「賢人深謀於廊廟、論議朝廷、守信死節。隱居巖窟之士、設為名高者、安婦乎。歸於富厚也」〔史記〕「貨殖列伝」〕「廊廟雖掄其材 巖穴猶毓汝德」〔本朝文粹〕卷一「視雲知隱賦」大江以言〕

◎鸞台 太政官の唐名。四「七言 歲暮於藤少侯書齋守庚申同賦明月照積雪各分一字心教」の「鳳閣鸞台」の語釈参照。

◎郊扉 郊外の門扉。「郷路通雲棧 郊扉近錦城」〔白氏文集〕六六九「送武士曹婦蜀」〕

◎鶴帳 白い帳？用例未見。

◎兼濟 天下の人々を救う。五「八月十五夜陪員外藤納言書閣同賦月照耀前竹心教」の「兼濟」の語釈参照。ただし、本詩序では、本来の意味だけではなく、内大臣が閑と忙（出仕と隱遁）とを二つながら兼ね備えていると言う意味にも使っているか。

◎曹子 曹植。魏武帝の第三子、文帝の弟。字は子建。「蒙求」「子建八斗」「陳思七步」の故事等、文章の才に優れていたことで知られる。「魏志、曹植、字子建、善屬文、下筆成章。謝靈運云、天下才共有一石、子建獨得八斗、我得一斗、自古及今、同用一斗。奇才博敏安有繼之」〔慶安頃五山版「蒙求」三八四「子建八斗」〕「世説、魏文帝嘗令陳思王七步作詩。如不成當行法。即應声曰、煮豆燃豆其 豆在釜中泣 本是同根生 相煎何太急。帝有慙色。陳思王、曹子建也」〔慶安頃五山版「蒙求」五七八「陳思七步」〕「業只好文 則是曹子建之再誕」〔本朝文粹〕卷九「春日前鎮西都督大王誦史記心教」大江朝綱〕

◎猗矣 ああ。猗は贊美の声。「陛下得之明德 至矣猗歎」〔本朝文粹〕卷四「諸公卿賀朔旦冬至表」菅原道真〕

◎文武 二府 文官と武官。藤原道兼が内大臣に右大将を兼ねているこ



づいており、雲の上まで拡がるかと思われる松の梢は寒々とした音を立て秋に和している。

その音を聞けば心は痛み茫然として涙をこぼすのみ。人生はあつという間で、生と死は流れに浮かんだり止まったりするようにはかないものだ。

十一 七言五月五日陪内相府池亭同賦雲峯入夏池応教一首〔勅新鱗臻辰并序〕

夫朝市之人徇禄

夫れ朝市の人は禄を徇め

山林之士逃名

山林の士は名を逃る

故蕭曹長忙仕而不隠

故に蕭曹は長く忙にして仕えて隠れず

巢由長閑隠而不仕

巢由は長く閑にして隠れて仕へず

雖彼古賢得中者少

彼の古賢と雖も中を得たる者少なし

於是

是に於いて

内相府東山之脚置一池亭

内相府東山の脚に一池亭を置きたまふ

蓋安和左僕射開七叟会之

蓋し安和の左僕射の七叟会を開きし

地也

地なり

伝之為主誠有以矣

之を伝へて主為る、誠に以有り

進宮啓沃於廊廟鸞台踏雲

進みては啓沃を廊廟に営み、鸞台に雲を踏む

退翫風流於郊扉鶴帳友月

退きては風流を郊扉に翫び、鶴帳月を友とす

兼濟之美誰敢問然

兼濟の美、誰か敢へて問然せむや

方今

まさに今

属此端午佳期

此の端午の佳期に属し

味以曹子之文藻

味はふに曹子の文藻を以てす

猗矣

猗矣

当文武二府之任

文武二府の任に当たり

縱山林四望之樂

山林四望の樂しみを縱にす

觀其

觀ればそれ

雲峯迎夏池水瀉陰

雲峯夏を迎へ池水陰に瀉く

臨麥風之緩吹

麥風の緩く吹くに臨み

喜梅雨之已霽

梅雨の已に霽れたるを喜ぶ

鶴翥紫霄自伴立沙之翅

鶴は紫霄に翥て自から立沙の翅を伴ひ

魚依碧岸還類登漢之鱗

魚は碧岸に依りて還た登漢の鱗に類す

遂使

遂に

競渡之舟棹輕

競渡の舟の棹輕きをして

空圧馬鞍嶄巖之黛

空しく馬鞍嶄巖の黛を圧さしめ

通波之閣簾卷

通波の閣の簾卷きたるをして

忽对峨眉重疊之膚者歟

忽ちに峨眉重疊の膚に対はしむる者か

既而

既にして

烏鸞難繫鸚盃頻飛

烏鸞繫ぎ難く鸚盃頻りに飛ぶ

憶曲水於春風桃源已遠

曲水を春風に憶へども桃源已に遠く

期重陽於秋露菊潭未芳

重陽を秋露に期せども菊潭未だ芳ばしからず

今之勝事不亦悦乎

今の勝事亦た悦ばしからずや

匡衡

匡衡

榮謝伯春未作詩家之宗匠

榮は伯春に謝せども未だ詩家の宗匠と作らず

步亜余子徒瘦学路之嶮難

歩みは余子に亜ぎて徒に学路の嶮難に瘦せたり

遺恨終篇不能詳録云爾

恨みを遺して篇を終ふ、詳録すること能はずと云ふこと爾り

遺恨終篇不能詳録云爾

恨みを遺して篇を終ふ、詳録すること能はずと云ふこと爾り

◎触感||景物が心に触れて悲哀の情を催すこと。「触感孤心苦 傷懷  
四面攻」(『菅家文章』卷五「賦葉落庭柯空」)

◎浮休||浮くことと止まること。生と死。「聖人之生也天行、其死也  
物化。」(中略)其生若浮、其死若休」(『莊子』刻意)「何必待衰老  
然後悟浮休」(『白氏文集』一七九「永崇里觀居」)

### 【参考】

『類題古詩』四七七に本詩の頷聯、剽聯を載せる。

### 【通釈】

九月庚申の夜、権中納言藤原道長様の書齋に於いて同じく、「夜坐つて  
松風を聞く」という題で詩を作る

左大臣殿の邸の前庭に一本の松の木がある。

氣候が寒くなればいつそう緑は鮮やかになり、日毎にその徳を新た  
にする。(その徳とは)志と節義とは強固且つまっすくで、その枝は豊  
かに生い茂っている。松を君子の樹と呼ぶのは、すなわちこのような  
樹を呼ぶのである。(左大臣殿はまさに君子と呼ぶにふさわしいお方  
だ)

さてここに一羽の鶴が遠くから飛んできて、この松に住み着い  
た。(権中納言殿が左大臣殿の婿君としてお住まいになった)鶴は  
松と千年の契りを結び、露を誡めて鳴き声を挙げ、夜更けになつて  
風を呼び込む。

この時、藤原中納言殿は庚申を守つて夜明けを待ち、あずまやに  
坐つて松風を聞いておられる。

緑の葉がざわざわと音を立てると、塵の積もつた長椅子を(庚申  
で眠る人のいない)暗い閨の前にお移しになり、もやにけぶる松の

枝がもの寂しい様子であるので(夜明かしするために)見事な肘掛  
けを暁方、寢室の外にお出しになる。

松風と同じ響きの音(琴の音)が響き合い、音楽を解さない者ま  
でが自ずと感じ入るに至つては、(松風は)氣高い人柄を一本松にた  
とえられたあの晋の嵇康が灯火のもと鬢の毛を冷たくして琴を奏で  
ているような冷やかな音を立て、(その音を聴けば)鬱蒼と繁る夏后  
氏の社の松に生じる女蘿を木の間から漏れる月光が照らしているよ  
うな物寂しさに一夜の酔いもすっかり覚めてしまふようなものだ。

まさに今、満座の人々がいうには

我らが中納言殿は、納言として政事の道に精通しておられる。尊  
ぶべきことではないか。詩をお作りになれば、その作品は詩境に合  
致する。地上にいるままで仙人となられたようなものだ。立派な人  
物を重用なさり、文章をお好みになる。このような中納言殿に、い  
つたい帰服しない者がおろうか。聖人の道が再び盛んになつたこと  
は、ここにおいて知られるのである、と。

私匡衡は、彈正少弼の任に当たること既に五年となりますが、未  
だにお引き立てにあずかつておりません。今宵一夜、中納言殿の詩  
宴に連なり松風の曲を聴くことができたことで、惨めな境遇を慰め  
たく存じます。思いを尽くせず、魂は迷うばかりですので、今宵の  
有様を詳しく述べるのができずにいる次第でございます。

詩作をともしする友人たちに誘われてこのすばらしい宴に連なつ  
た。

松の木の下で風の音を聴いて長い夜を過ごす。

漏刻が真夜中を告げると霧にけぶる松葉は風にそよぎ  
ぼつんともつた灯火に微かに緑の枝が見える。

月明かりの下、琴の音にまがう松風の音にふと気づけば暁方が近



彈琴、有一人面甚小。斯須轉大、遂長丈余。黑單衣草帶。愁視之既熟、乃吹火滅。曰、恥与魍魅争光」へ『芸文類聚』樂部四「琴」へ

◎絲桐ニ琴。「琴曉絲桐清 彈為古宮調」へ『白氏文集』二二三七「寄崔少監」へ「孤竹当唇秋月落 絲桐応指曉風輕」へ『天徳三年關詩行事略記』「秋声脆管絃」大江維時「類題古詩」所収へ

◎夏后氏之社ニ夏后氏は禹の建てた国の国号。夏の国は土地の神を祀る社の神木として松の木を植えた。「哀公問社於宰我。宰我对曰、夏后氏以松、殷人以柏、周人以栗」へ『論語』八佾へ

◎女蘿ニ松柏ニ生じる苔の一種。ひかげのかづら。「薦与女蘿 施于松柏」へ『詩経』小雅「頌弁」へ

◎四坐ニ四方の座。満座。「願先生為之賦、使四坐咸共榮觀、不亦可乎」へ『文選』卷十三「鸚鵡賦」禰衡へ

◎龍官ニ大納言、中納言の唐名。「偶遇攀雲龍官駕 幸聞披霧鷲台談」へ『江吏部集』卷上「冬日登天台即事応員外藤納言教言」へ「遂依惟馨神徳、適昇顕要之龍官、職列九卿」へ『平安遺文』四卷一四五四「大宰府政所牒写」康和三年十月三日へ

◎政途ニ政の道。政治の方法。「論之政途、事乖公平」へ『平安遺文』九卷四五四九「宇佐八幡宮行事例定文」寛平元年十二月二十六日へ

◎鳳毫ニすばらしい文才「晋集華林染鳳毫而遊履者也」へ『江吏部集』卷下「七言三月三日同賦花貌年年同応製」詩序へ

◎烏台ニ御史台の異名、彈正台の唐名。

◎鳳翼ニ立派な人物。「攀龍鱗附鳳翼、以成其所志耳」へ『後漢書』光武紀へ「若使附龍尾以揚名、寄鳳翼以顕行」へ『平安遺文』八卷四四一二「僧泰範書状」弘仁七年五月へ

◎松風之曲ニ楽府、琴曲歌辞に「風入松」がある。晋の嵇康の作。「清冷石泉引 澹泞風松曲」へ『白氏文集』二二七二「和順之琴者」へ「酒酣莫奏蕭蕭曲 峽水松風物断腸」へ『菅家後集』「感吏部王彈琴応制」へ

◎蓬衡ニ衡は衡門。木を横たえただけで門としたもの。蓬衡は葎の門。身分賤しいものの家。ここでは、匡衡の家の謙称。また、衡の字は匡衡の「衡」を響かせている。「臣、蓬衡蠹品 樗散陋姿」へ『李善上文選註表』へ

◎觀縷ニ詳しく細かいこと。「斯寔神妙之饗象、嗟難得而觀縷」へ『文選』卷五「呉都賦」左思へ

◎詩朋ニ詩作の友人。詩友に同じ。「詩朋何以称閑伴 琴酒在傍只任情 誘引桐孫為久契 提携蓮子不相争」へ『江吏部集』卷中「閑伴唯

琴酒」へ「酒客詩朋催興所」へ『本朝無題詩』卷二「賦早涼」藤原忠通へ

◎引誘ニいざなう。誘引に同じ。「鶯声誘引来花下 草色拘留坐水辺」へ『白氏文集』「春江」『千載佳句』「和漢朗詠集」上「鶯」に所収へ

◎佳遊ニよい遊び。「属千花之争綻 賜一日之佳遊」へ『本朝文粹』卷十「暮春同賦落花乱舞衣各分一字応太上皇製」大江朝綱へ

◎夜自留ニ「留 ヒサシ」へ観智院本「類聚名義抄」へ

◎暗漏ニ暗闇での漏刻。夜の時間。「闇漏猶伝水 明河漸下山」へ『白氏文集』二二二五「待漏入閣書事奉贈元九学士閣老」へ

◎三更ニ一夜を五つに分けた三つ目の時。真夜中。「三更待月事如何 目倦心疲望裏疎」へ『菅家文章』卷一「八月十五夕待月席上各分一字」その二へ

◎烟葉ニ霧にかすむ松の葉。「烟葉葱蘢蒼塵尾 霜皮剥落紫龍鱗」へ『白氏文集』六八八「題流溝寺古松」へ

◎雲外ニ雲の上。「雪中放馬朝尋跡 雲外聞鴻夜射声」へ『和漢朗詠集』卷下「將軍」へ

◎蓋陰ニ傘のように伸び広がった松の枝蔭。「抱朴子曰、天陵偃蓋之松 太谷倒生之松」へ『芸文類聚』木部上 松へ「孤松臨岸蓋 落葉繁波船」へ『菅家文章』卷二「灘声」へ「沙岸柳低糸縷乱 池塘松老蓋蔭繁」へ『本朝無題詩』卷十「城北精舍言志」菅原時登へ

【語釈】

◎仲春庚申||仲秋庚申の誤りか。諸本、皆「仲春庚申」だが、詩序中の「居烏台之任五年」から考えると、本詩会は匡衡が弾正少弼となつて五年目の永延二年の開催となる。しかし、永延二年仲春二月に庚申はない。詩序中の「歳寒弥鮮」「契千年而警露」「深調絲桐以秋鬢冷」や詩中の「雲外蓋陰冷和秋」等の句から判断して、仲秋の作と考えられる。それならば、永延二年八月六日となる。

◎員外藤原納言||藤原道長。道長の任権中納言は永延二年正月二十九日「公卿補任」による。

◎文亨||書斎。「過尾州滋司馬文亭感舍弟四郎壁書彈琴妙聊叙所懷猷以呈寄」へ「菅家文章」卷一

◎夜坐聽松風||句題の基になつた詩句は未詳。

◎左相府||左大臣源雅信。道長は永延元年に雅信の女倫子と結婚した。

◎歳寒弥鮮||氣候が寒くなると益々色鮮やかになる。「歳寒然後知松柏之後凋也」へ「論語」子罕

◎君子之樹||「鶴栖君子樹」へ「李嶠百二十詠」「松」へ「老鶴栖 李嶠百詠曰、鶴栖君子棲」(樹)(朱書)。張庭芳曰、千年鶴棲君子樹」へ「文鳳抄」草木部

◎仙雀||仙鶴に同じ。鶴は仙鳥なのでいう。

◎警露||鶴は秋になり露が降りると警告の声を挙げる。七「秋夜陪右親衛員外垂相亭子守庚申同賦秋情月露深」の「一警」の語釈参照。

◎五夜||一夜を五つに分けた五番目の時。寅の刻(午前四時頃)にあたる。「不睡騰々送五夜」へ「菅家文章」卷四「不睡」

◎艾漏||夜明け間近の時刻。艾はひさしいの意。「夜如何其 夜未艾 庭燎晰晰」へ「詩経」小雅「庭燎」へ「談玄之席漏艾 拳白之杯醉蘭」へ「本朝文粹」卷八「秋日於河原院同賦山晴秋望多」藤原惟成」艾漏

漸闌恨正長 帰路露深添落淚」へ「本朝無題詩」卷三「感牛女」藤原通憲

◎亭子||亭に同じ。あずまや。「与諸同年賀座主侍郎新拜太常。同宴 肅尚書亭子」へ「白氏文集」六一〇、題

◎颯爾||風の音。「蕪然蕙草暮 颯爾涼風吹」へ「李太白詩集」卷五樂府「秋思」

◎烟枝||もやにかすむ枝。「露草月侵菴怨苦 烟枝嵐引鳥栖難」へ「類古詩」32「草木凝秋色」江相公

◎凄其||寒くて寂しい。「凄其以風」へ「詩経」邶風「緑衣」へ「病魂黙然 銷 老淚凄其出」へ「白氏文集」二二五八「和寄樂天」

◎塵榻||塵の積もつた長椅子。「華枝滿院空啼鳥 塵榻無人憶臥龍」へ「鄂州寓嚴澗宅」元稹「千載佳句」「憶友」所収

◎凭||ヨルへ觀智院本「類聚名義抄」

◎玉几||玉で飾つたひじかけ。「周礼五几。玉几、彫几、彤几、鬋几、素几」へ「説文」へ「王乃洮類、水相、被冕服、憑玉几」へ「書経」「顧命」

◎晚枕||晚方の枕もと。「曲驚楚客秋絃韻 夢断燕姬晚枕薰」へ「天德三年關詩行事略記」「蘭氣入輕風」橘直幹「和漢朗詠集」上「蘭」所収

◎「晚枕空夢林蝶戲 疎枝只待谷鶯来」へ「類題古詩」95「歳暮思春花」具平親王

◎同声相應||同じ調子の音は互いに共鳴する。意見を同じくするものは自然に相合う。「文言曰、子曰、同声相應、同氣相求」へ「易経」「乾」へ「客曰、同類相從、同声相應」へ「莊子」漁父

◎異類||種類を異にするもの。人種、意見を異にする種族。

◎嵒中散之居||嵒中散は晋の嵒康。嵒康はその人となりの気高さを堂々とした一本松にたとえられた。「晋書、嵒康、字叔夜譙国人。山濤云、嵒叔夜為人、巖々若孤松之獨立、其醉也、玉山之將崩也。後

為中散大夫」へ「蒙求」五六「叔夜玉山」へ「語林曰、嵒中散夜燈火下



# 江吏部集試注(三)

木戸裕子

一、訓読文は必ずしも平安時代の訓みによるものではないが、古辞書類を参考にした。

※本稿では巻上十番と十一番の詩序及び詩を取り扱う。

(承前)、(二)は『人文』(鹿児島県立短期大学)第二二号に掲載している。

## 凡例

一、底本は群書類従本を用い、後述の諸本により適宜異同を挙げた。  
一、校異では、逐一の異同を挙げるのではなく、本文解釈に関わるものだけを記した。したがって、異体字については挙げていない。  
一、校異に用いた諸本と略号は次の通りである。

- 内閣文庫(旧浅草文庫)本―(内)
- 陽明文庫本―(陽)
- 静嘉堂文庫本―(静)
- 国会図書館本―(国)
- 東大図書館(E45 656)本―(東A)
- 東大図書館(旧南葵文庫)本―(東B)
- 島原松平文庫本―(島)
- 京大図書館本―(京)
- 賀茂別雷文庫本―(賀)
- 名古屋市立鶴舞中央図書館本―(鶴)
- 本朝文粹(新日本古典文学大系)―(粹)
- 本朝麗藻(校本本朝麗藻)―(麗)
- 山口県立図書館本―(山)
- 祐徳稲荷本―(祐)
- 神宮文庫本―(神)
- 無窮会図書館本―(無)
- 岡山大学図書館本―(岡)
- 東北大学図書館本―(東北)
- 多和文庫本―(多)

一、本文の漢字はできるだけ現行の字体に統一した。ただし、次の漢字は底本の字体を尊重した。

煙・烟 花・華 叢・藜 窓・牕など。

一、割注など小書の部分は「」に入れて示した。

十 仲春庚申夜陪員外藤納言文亭同賦夜坐聽松風一首〔并序〕

左相府裏有松于前

左相府裏、前に松有り

歳寒弥鮮日新其德歳

歳寒にして弥鮮、日にその徳を新たにす

志節勁直枝葉繁昌

志節は勁直たり、枝葉は繁昌せり

所謂君子之樹即是也

所謂君子の樹、即ち是なり

爰有一仙雀遥来栖息其上

爰に一仙雀有り、遥かに来りてその上に栖息す

契千年而警露

千年を契りて露を警しめ

送五夜而来風

五夜を送りて風を来す

于時藤納言

時に藤納言

守庚申兮待艾漏

庚申を守りて艾漏を待ち

坐亭子兮聽松風

亭子に坐して松風を聴く

翠葉颯爾移塵榻於暗閨之前

翠葉颯爾、塵榻を暗閨の前に移し

烟枝凄其凭玉几於曉枕之外

烟枝凄其、玉几を曉枕の外に凭す

至如彼同声相应類自感

彼の同声相应じ

嵒中散之居燈深

異類自から感ずるに至りては

調絲桐以秋鬢冷

嵒中散が居の燈深く

夏后氏之社月暗

絲桐を調べて以て秋鬢冷しく

夏后氏が社の月暗く